

陽ひ  
の  
光ひかり

幸徳環境設計

ジリジリと、背せ中なかに容よう赦しやなく朝あ日さひが照てりつ  
ける。あたかも、ぼくだけに集しゅう中ちゅう砲ほう火かを浴あび  
せるかのように。

一年いちねん前まえの朝あさ、彼かれがぼくに言いった。

「なあ、おまえ、陽ひのあたる明あかるい世せ界かいに一いっ緒しょ  
に行いかないか。もうみんな、ここから出でてい  
ったぞ。俺おれらだけになっちまったよ。俺おれも、  
やっと踏ふん切ぎりがついたんだ」

けれど、ぼくは怖こわかった。  
「やめておくよ」

ぼくは、それだけしか彼かれに言いえなかつた。

彼が、ぼくに言った言葉が一年間、頭から離れることはなかった。ぼくを一年間、苦しませてきた言葉だ。一時も忘れることはなかった。

彼は。ぼくの返事を聞くと、憐れむように言った。

「よわむし」

そして彼は、ぼくを振り返ることなく、行ってしまった。

静寂と闇が、またぼくの世界となった。七年間、ぼくは、この静寂と闇の世界で過ごしてきた。この静寂と闇の世界から抜け出すことを、ずっとずっと願ってきた、夢見てきた。そう、ずっと願ってきたはずだった、願っていたはずである。

けれど機が熟した一年前、そう、この静寂と闇から抜け出すための準備が整った一年前である。ぼくは、躊躇した。そして、この静寂と闇の世界に留まることを、自らの意思で選んだのである。

ぼくは、新天地への切符を自ら放棄して、またこの暗闇と静寂の世界を選んだのである。いや、違う。選んだのではなく、新しい世界、新天地、分からない世界が怖かったのである。

ぼくらは生まれて直ぐに、この暗闇の中を生きる場所に選んだ。選んだとういよりか、選ばざるをえなかったのである。それが、ぼくらの残された、生きるための唯一の選択肢であったからである。

そしてぼくらは、この暗闇の中で微かな音を聞き分け、微かな振動を感じとり、危険から身を守ってきた。それを怠った者は、生きていくことさえ許されない。ただ、生きるということだけを考えてきた。七年間ずっと。ただ生きる。何を求めているのかさえ分からない。時間だけが過ぎていく。年齢だけを重ねていく。けれど、死ぬことは考えられない。死ぬことは怖い。

そんな七年目の夏に、ぼくらにとっての  
転機がやってきた。

地表付近の土が、わずかながら熱を帯び、  
樹木も猛々しく蒼く色づいている。その蒼い  
葉にはギラギラと陽の光が照りつき、水分を  
一杯に吸い込み、樹根の先端まで樹液が潤う  
頃、ぼくの体に異変が生じた。

体が火照り、何か得体の知れない何かに引  
っぱられるような感覚になったのだ。

ぼくは、この得体の知れない何かに引かれ  
るがままに、地上を目指した。坑道をひたす  
ら掘り進んだ。迷うことなく。がむしやらに掘  
り進んだ。

けれどぼくは、あと少しという所まで来て  
止まった。止まってしまったのだ。

ぼくは、ここまで、ここまでは無心で掘り進  
んで来ていた。しかし今、初めて冷静になっ  
た。改めて考えてみた。

決して怖気づいたのではない。そう、そう思  
いたい。

ここに来て、初めて気付いたことがある。  
こんなにも多くの仲間がいたことを。

七年間、ある程度の数の仲間が、ぼくの周りにいるのは、微かに感じていた。同じような物音、微かに匂う自分と同じ樹液の香り。

けれど、お互いの生活圏を脅かすことがないように、互いの距離を保ちながら過ごしてきた。

だが今、思っていた以上の仲間が、ぼくと同じように地上を目指し、坑道を掘り進んでいることが分かった。地上に近づくにつれ、土を掘り起こす音、振動が大きくなり、仲間の気配が近づいてきた。

今ここで、こうして止まっているのは、きっと、ぼくだけではないか。なぜ、みんなは迷わず、ひたすら地上を目指すことが出来るのであるか。ぼくだけが、特別な存在なのだろうか。分からない。

ぼくは、ほぼ丸一日考えてみた。けれど、答えをみつけることは、出来なかった。

そんなぼくを、意気地なしとも思えるぼくを、背後から急きたてるように、彼が現れたのである。

ぼくは、驚愕した。実際に、自分と同じ生物に出遭ったのは初めてのことであつた。

そして彼は、こう言つた。

「いやあ、おまえのおかげで楽が出来たよ。みんなが、ゴソゴソ、ゴソゴソ、ゴソゴソと地上を目指して掘り進んでいたのは、分かつていたけど、かつたるくてな。

また、この上の世界のこととも分らないしな。慌てて行かなくても、いいと思つてな。それと、誰かが掘った坑道を使わせてもらえば、後から行つても、直ぐに追いつけるだろう。

それに、楽じゃん」

ぼくは、このぶつきらぼうというか、単純と  
いうか、この能天気な樂觀主義者が、とても  
不愉快で疎ましく感じた。

彼と別れてから、一年が過ぎた。今年もまた、暑い夏がやってきたようだ。昨年以上に、地表付近の土が熱を帯びてきた。この一年間は、長かった。いや、短かったのかもしれない。

今、ぼくは、一年前のあの時と同じように、体の火照りを感じると共に、またしても得体の知れない何かに引っぱられ、惹かれ、誘われるかのように、もくもくと坑道を掘り進んでいる。

なぜかは分からないが、今のぼくには迷いが無い。もう迷わない。もう悩まない。一年前の、あの時とは違う。何がどう違うとは言えないが、言葉では表現しようもない感覚だけが、何か違う感覚だけが、はっきりと違う何かを感じとっている。

だが、地表付近に近づき、あと一かきと、いったところで本能在、何かを告げる。今は、危険だと。今は出るべきではないと。

地上からは、耳を塞ぎたくなるほどの何かの叫びが、叫びのような鳴き声が、聞こえてくる。そして、その鳴き声の魂に呼応するかのように、地表の温度は熱い。

ぼくは、やがて地表の熱が徐々に冷めていき、あたりが静かになり、外の世界が地中と同じよう暗闇に包まれる時を、静かにまつた。

その間、何度も気持ちを抑えることが出来なくなりそうになった。今すぐにでも、飛び出したい衝動にかられた。そのたび、本能的に身の危険を感じ、気持ちを抑制した。

ほかの仲間も、きっと同じ思いなのだろう。ぼくの周りでも、一つ年下の仲間たちが、その時を、地上に出る瞬間を待っているようだ。

そう思うと、幾分心が落ち着いていた。

なぜ、一年前のあの日、ぼくは地上への扉を、自ら閉ざしてしまったのだらうか。今、考えると、あの時の思い、あの時の気持ちが無理解できかない。自分のことではあるが、理解に苦しむ。



過ぎてしまえば、そんなものなんだろう。そんなものなんだろうと、片付けられる自分が、今は誇らしい。なぜ、ここまで気持ちが変わったのかは分からない。分からないけれど今は、それでいいとさえ思える。

「さあ、出るぞ」、自然に声が出た。自然に体が動き始めた。すると、もう一かきという所で、かさぶたのようにわずかにかかっていた土が『バサッ』と、ぼくの顔に降りかかってきた。それは、地上と地中を隔絶していた扉が開いた瞬間であった。

ダークブルーに染めあがった空には、雲ひとつなく、煌々と月が輝いている。地中には届くことのない光が、ぼくを照らしている。ぼくだけにスポットライトを浴びせているかのように。

ぼくより一年ほど遅く生まれた仲間も、この思い、光を感じていることであろう。つぎつぎと地上への扉を自ら開け、この月明かりに照らされながら大木を上っていく。

ぼくも彼らと同じように、生まれてからずっと、ぼくの空腹を満たし、時には苦く、時には甘く、時には辛く、そう、ぼくが吸い続けた樹液の主である大木を上り始めた。なぜ、この大木に上るのは分らない。月明かりの下、地表を徘徊して、ほかの木を選んでも良いが、なぜか自分が吸い続けた大木を上り始める。それは、ほかの仲間も同じであった。

誰ひとり、異なる行動をする者はいない。ぼくは、この大木に初めて尊敬と敬意、偉大さを感じた。これまでは、あたり前のようになんとも思ったことなど一度もない。けれども八年間、いつでもそばで、いつでもぼくを見守り続けてくれた、この大木に、今は感謝の気持ちでいっぱいになった。

ぼくは一步、一步、この大木のゴツゴツとした樹皮に爪を立てながら慎重に、着実に歩を進めていくうちに、ぼくの体がなんともいえない感じになってくるのに気付いた。

そう、月明かりに照らされた背中が、みよ  
うに、むず痒いのである。

ぼくは、この背中の中のむず痒さを、最初は気に  
せずにした。これまでと同じように大木を、  
なぜかまくもくと上っていた。けれど、この  
むず痒さは次第に激しさを増した。

ぼくは、とうとう我慢しきれなくなっ  
て、適当な場所を探し、隠れるように、そ  
の場で立ち止まってしまった。そして、全  
ての手足でしっかりと樹皮に爪を立て、このむず  
痒さ、体の異変に対して、そこでじっと耐  
えたのである。

するとどうであろう、ぼくの中に、違  
うぼくがいることを感じた。この違う自分  
が何者なのかは分からない。けれど、確  
実に、存在している。それがいったい何  
者なのか分からない。

考える。ぼくは考えた。けれど、だ  
んだん意識が遠くなっ  
ていく。むず痒さが薄らい  
でいく。手足の感覚が、なくなっ  
ていく。

この場所に静止してから、いったいどれくらい時間が過ぎたのであろう。今まで、月明かりは眩しいくらいであったはずであるが、今は、その輝きは薄れ、ぼんやりとしている。月の形がようやく確認できる程度になっていく。きつと、かなりの時間、ここに留まっていたのだらう。

この世界が徐々に陰から陽、月の光から陽の光へと移行しつつある時であった。ダークブルーだった空は、うっすら白くなってきている。

意識の目覚め、薄らいでいた感覚が再びもどる。ぼくの中の目覚め。飛び出したい。違う何かに変わりたい。何かは分からない。けれど、今までの自分から抜け出したい。そう強く願った瞬間、『ビリッ、ビリ、ビリ』。目の前に今までの自分の頭が見えた。

この時ぼくは、今までの自分から抜け出したことに気付いた。

ぼくは今、本当にこう思うことができる。  
この八年間、無駄な時間を過ごしてきたわけ  
ではないと。ほかの者たちより一年遅れでは  
あるが、無駄な一年間とは少しも思わない。  
しばらくすると、ぼくは完全に、今までの  
自分から抜け出した。目の前には、今までの  
自分がある。改めて、ぼくはこんな姿をして  
いたんだなと思う。この姿で八年間、地中で生  
きてきたんだなと思う。  
今の自分の姿は、自分では見ることが出来  
ないが、そばにいる仲間の姿を見れば、容易に  
察しがつく。きっと同じ姿なのであろうと。  
新しい自分には、今までとは大きく異なる  
ものが、背中に付いている。体全体を覆う、  
その異様なものを持ってすれば、この空を  
自由に羽ばたくことが可能であることは、直  
ぐに分かった。  
今直ぐにでも、この空を自由に飛びまわり  
たい気持ちではあったが、まだ、この背中の  
ものは自由が利かない。

今は、じっと待つ。待っている間も、苦ではない。かえって心地良い感じである。今まではない、暖かさを背中にジリジリと感じている。

ぼくが八年間いた地中、暗闇と静寂の世界では、色の識別はつかず、どんなに鮮やかな色であったとしても暗い色にしか見えない。音も微かに聞こえる程度であった。

そして、地表付近以外の土は、一年中、温度の変化すらない。しつとりとしていて冷たく、じめじめした感じであった。

けれど、それがあたり前であって、べつに違和感はなかった。

しかし、この地上では、さまざまな色があり、気温も変化している。今まで、あたり前であったものが、あたり前ではない。

現に、ぼくが地中から地上に這い上がってきてからというものの、空の色、その周りのもの全てが変化している。

空そらが明あかるくなるにつれ、さまざまおとな音が聞きこえてくる。

それは、ぼくら以外いがいの生き物ものが発はっする声こえであつたり、物ものと物ものがぶつかりあう音おとであつたり、あらゆる所ところから音おとが聞きこえてくる。

そして、気き温おんも一日いちにちを通して常つねに変へん化かしている。

先さきほどから、ぼくの背せ中なかに陽ひの光ひかりがジリジリと照てりつけ始はじめた。まるで、ぼくを焼やき焦こがすように照てりつける。熱あつい、とにかく熱あつい、しびれるように熱あつい、けれど心こ地ちよい。なんともいえない気き持もちよさである。

そろそろ、ぼくも飛とんでみるかな。もう、周まわりの者ものも飛とび立たち始はじめている。四し方ほう八はっ方ほうに飛とび立たつていった。

ぼくはとりあえず、二に百ひゃくメートルくらい先さきに見える、この大たい木ぼくよりひと回まわりほど小ちいさい木きまで飛とんでみることにした。

『パタパタパタ、パタパタパタ』、ぼくは、羽はばたいた。

顔かおに風かぜを受け、背せには陽ひの光ひかりを浴あび、眼がん下かに  
広ひろがる色いろとりどりの景色けしきを眺ながめながら、ぼく  
は飛とんだ。

ほんのひと時ときの空くう中ちゆう飛行ひこうであつたが、なん  
ともいえない心地こころよさであつた。

思おもえば、地ち上じやうから這はい上あがつてきてから、  
まだ半はん日にちほどではあるが、この半はん日にちの間あいだに、驚おどろ  
くような出で来き事ごとがづぎと起おこつている。

今いままでの、八はち年ねん間かんの淡たん々たんとした暮くらしを一いっ蹴しゆう  
するかのよう。

ぼくはいつしか、この思おもい、想おもいを、込こ  
あげる感かん情じやうを抑おさえることが出で来きなくなつた。

そして気き付づいてみると、ぼくは叫さけんでいた。

『ミーンミン、ミーンミン、ミーンミン』と。

声こえを張はりあげ叫さけんでいた。

『ミーンミン、ミーンミン、ミーンミン、ミーンミン』と。

思おもう存ぞん分ぶん叫さけんで、鳴ないていた。

『ミーンミン、ミーンミン、ミーンミン』と。

『ミーンミン、ミーンミン、ミーンミン』と。



ぼくはこの日から、くる日もくる日も、叫び、  
鳴き続け、そして時には羽ばたいた。  
なぜか分からないが、鳴き続けることが使  
命であるかのように。自分の想いを何かにぶ  
つけるかのように、ぼくは鳴き続けた。  
そして地上から這い上がってきから、陽  
の光を受け始めてから五日目の日に、ぼくは  
これまでとは違う、胸が高鳴る経験をした。  
それは、ぼくがいつものように、『ミーンミ  
ン』と鳴いている時であった。  
『パタパタパタ』と、ぼくのそばに雌のセミ  
が寄ってきたのである。それまでのぼくは、  
自分以外のセミのことなど考えたこともなか  
った。自分以外の雄のセミが、ぼくのそばで鳴  
いても気にすることはなかった。けれど今、  
この雌のセミが近くに寄ってきた時、その  
瞬間からなぜか気になった。気にせずにはい  
られなくなったのである。なぜか、なぜなの  
かは分からない。

彼女の出遭ってから二日の時が過ぎた。

そう、たったの二日間である。とても短い二日間である。なのに、ぼくの意識が遠くない。なだけに、ぼくの意識、感覚が薄れていく。

今ぼくは、彼女のことを、ただただじっと見つめている。

彼女は樹皮にすっかりつかまり、その樹皮と樹皮のわずかな隙間に、ぼくたちの卵を産みつけている。淡々と、その作業をこなしている。もう、ぼくのことなど、ぼくの存在など気にする風もなく。

彼女の姿が、ぼんやりとして見える。

けれど、もう少しだけ彼女を見続けたい。もう少しだけ、少しでいいから……。見たい……。

彼は、ほかのセミより一年遅れではあるが、  
自らの意思で地上に出てきた。そして、暗闇と  
静寂の世界から抜け出し、陽の光を体いつぱ  
いに受けながら、七日目の朝に、その生涯を終  
えた。

（陽の光 完）